

## 翻訳監修の序

本書の「われわれは抗菌薬の時代の終焉にいるのか？」というショッキングな出だしは第1版と変わっていない。微生物学や臨床感染症学に関する知識不足や抗菌薬の乱用などを指摘する内容も同様である。実際、抗菌薬の時代の終焉を示唆する現象は第1版の出版以来改善の気配を見せていないどころか悪化の一途である。本書曰く「ペニシリン耐性肺炎球菌、院内でのMRSAやパンコマイシン耐性腸球菌の比率は増加の一途である」。そしてこの現象は米国でもわが国でも同様であり、本書がわが国の感染症診療の実態に警鐘を鳴らす意義も変わっていない。

第1版の序文にも記したが本書は「マニュアル」と邦訳されているが、単に各感染症に対して使用すべき抗菌薬の名前と投与量を並べるだけではなく、各感染症に関する微生物学や病態生理も簡潔にまとめられておりハンディな教科書的なたたずまいである。しかし同時に「喀痰グラム染色と培養」、「定着VS感染」といったきわめて実際的な日常診療上の盲点、注意事項などに関する記載も適所に配分されており、このあたりは各臨床状況の固有性を考慮せずブルドーザー的に画一的な診断・治療を勧める傾向の強い他の米国のマニュアルとは一線を画している。

親切・丁寧な訳注も原著にはない付加価値である。優れた訳注が加えられているため米国とは異なるわが国独特の状況にあっても本書の利用価値が全く低下しておらず、かえって彼我の違いを考慮する良い材料を与えていている。

本郷偉元先生と彼に協力された先生方のご努力により生まれ変わった第2版の内容はかなり増加している。しかし編集部のご努力でページ数などはあまり変わっておらず、もちろん読みやすさ、臨床現場での使いやすさも前の版から変わっていない。第1版同様、本書が1人でも多くの読者を得て抗菌薬の終焉を恐れる必要のない臨床現場に変えてくださることを切望する。

2011年3月

青木 真